

不登校傾向生徒に対する早期前対応

1 はじめに

昨今の学校の抱える問題の一つに不登校があげられる。本校においても、不登校生徒や不登校傾向の生徒が増加しており、早急な対応が求められていた。

その現状から、数年前から学校全体として様々な角度から手立てを行っている。例を挙げると、適応指導教室、在宅オンライン授業、複数担任制、定期考査廃止（小範囲テストの実施）、制服改正、校則改正、課題改正、ASSESS やストレスチェックの実施、などがある。また、週一で行う生活指導委員会、不登校生徒指導委員会、スクリーニング会議を通して、生徒の実態把握を行い、組織的に早期前対応を行う。

上記の本校の取組の中で ASSESS・ストレスチェックの実施、スクリーニング会議に焦点を当て、そのデータと不登校傾向の生徒数との関連性から、どのような成果が得られ、どのような課題があるかを検証し、今後の不登校傾向生徒へのアプローチにつなげたいと考え、本研究を設定した。

2 研究の経過

◇1 学期

5月24日	ASSESS・ストレスチェック実施
5月29,30日	第1回スクリーニング会議
6月28日	ASSESS・ストレスチェック実施
7月5日	第2回スクリーニング会議

◇2 学期

10月28日	ASSESS・ストレスチェック実施
11月6,7日	第3回スクリーニング会議

◇3 学期

1月29日	ASSESS・ストレスチェック実施予定
2月12日	第4回スクリーニング会議実施予定

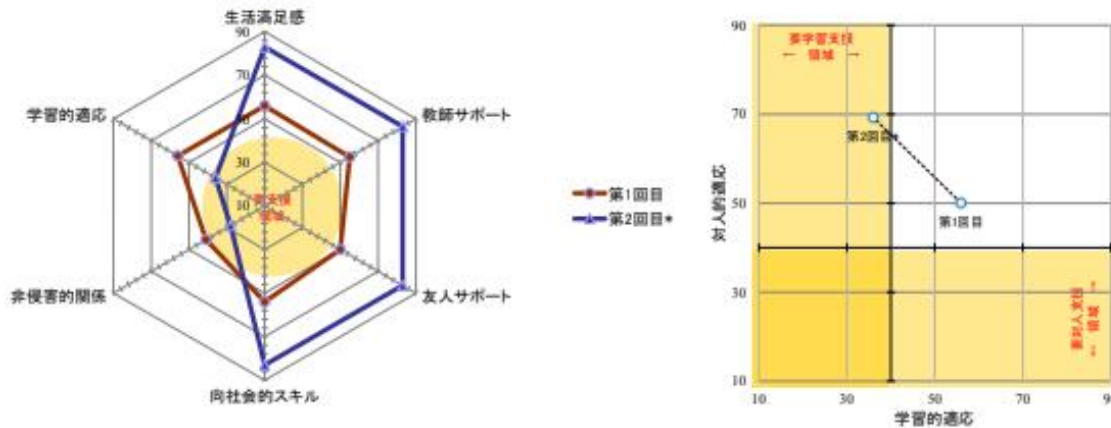
3 研究内容

(1) ASSESS について

アセス「ASSESS」(学校環境適応感尺度)とは、適応感(個人と環境との主観的な関係)を測定するもので、学校適応感を測定することは、各生徒が感じているSOSの度合いを測定することである。学校適応感は、①生活満足感②教師サポート③友人サポート④向社会的スキル⑤非侵害的関係⑥学習的適応の6因子で構造されている。34項目の質問に答えることで、生徒がどのようなことに困り感を感じているかを数値とグラフで可視化できる。

適応次元	第1回目	第2回目*	第3回目	最終回のコメント	適応次元の特徴
生活満足感	56	83		特になし。	生活全体に対して満足や楽しさを感じている程度で、総合的な適応感を示します。
教師サポート	55	83		特になし。	担任の支援があるとか、認められているなど、担任との関係が良好だと感じている程度を示します。
友人サポート	50	83		特になし。	友だちからの支援があるとか、認められているなど、友人関係が良好だと感じている程度を示します。
向社会的スキル	54	83		特になし。	友だちへの援助や友だちとの関係をつくるスキルを持っていると感じている程度を示します。
非侵害的関係	41	28		否定的な友だち関係がかなり見られます。友だちとのかかわりの確認、早急な支援が必要です。	無視やいじめなど、拒否的・否定的な友だち関係がないと感じている程度を示します。
学習的適応	56	36		学習への適応感がやや低くなっています。学習の様子を確認しましょう。	学習の方法もわかり、意欲も高いなど、学習が良好だと感じている程度を示します。

*1) 回答に矛盾や衝動的な反応が見られ、結果が正確でない可能性があります。



注) 得点は標準化した「適応度」で、高いほど適応的であることを示します。左のチャートは、6次元での適応を示し、カラー線が外側に広がるほど、適応しています。オレンジの領域は要支援領域(<40)です。右のプロットは、学習的適応と対人的適応次元での適応を示し、右上ほど適応しています。それぞれオレンジの領域は要支援領域(<40)です。マーカーは、生活満足感の適応度で、要支援は赤の△(<30)とオレンジの○(<40)で、適応群は緑の○(≧40)青の○(≧50)で示してあります。グラフの読み取り方は、解説書2章、3章を参照してください。

(図1)

(図1)の見方は、各項目の質問についての結果が数値で表れており、自動的にその回答に応じたコメントが表示される。左下のグラフは、数値をグラフ化しており、前回の結果との推移が明確にわかるものである。右下のグラフは、どの領域が上昇し、下降したかを表しているものである。

(2) ストレスチェックについて

ストレスチェックとは、生徒が google フォームの 31 項目の質問に答えることで、どのようなことに、どの程度ストレスを感じているかを確認するものである。特定の質問で気になる内容を書いている生徒や、数値が一定値を超えた生徒がリストアップすることで、より明確に、困り感を抱いている生徒を把握することができるという特徴がある。

年	組	番	氏名	前回の数値	51 ※30 以上で ストレスあり。 50以上は	く 合計	欠席日数 (遅刻早退)						アセス
							4月欠席	遅刻	5月欠席	遅刻	6月欠席	遅刻	要注意
1年	1組			48	49	7							
1年	1組			62	61	8							学習、非機、生活↑
1年	1組			57	54	8							未
1年	1組			67	48	10					2		生活↑
1年	1組			0	65	14	1	4	12	6	6	10	未
1年	1組			71	68	12							教師↓
1年	1組			75	66	12					1	1	教師、友人、学習↑
1年	1組			54	46	8					1		

(図 2)

(図 1) の見方は、前回のストレス数値と今回のストレス数値が表れ、一定値 (50) を超えると自動的に色がつく。また、左から 3 行目は、「反転項目」で、ストレスを発散できる力があるかどうかを表した数値である。その右側が月別の欠席状況、遅刻早退状況であり、右側がアセスの困り感である。

(3) スクリーニング会議

上記の ASSESS とストレスチェックの結果から、各学年で不登校傾向である生徒や、不登校傾向になりそうな生徒を 10%~15%抽出することで、不登校になる前に対応すること (早期前対応) を目的とする会議がスクリーニング会議である。管理職、生活指導担当、不登校指導担当、学年部の教師が会議に入り、抽出した生徒とその困り感を確認するものである。

生徒の様子(困り感)	第 1 回スクリーニング会議後の対応	第 2 回スクリーニング会議後の対応
		<ul style="list-style-type: none"> ・対応した日付 ・支援方法 ・生徒の様子
学習面、被侵害的関係の数値が高い。アン	6/6教育相談 不安なのは勉強で特に数学。でも	2024/09/04 授業は元気よく参加しており、学校
フラッシュバック以外が高め。思いうるように行	6/6 教育相談 学校は楽しい。クラスの友達から	9/5 9/5 夏休み明けて、とにかく眠たい。
	6/6 教育相談 学校は楽しい。授業も楽しいが難	9/3 夏休みは楽しめた！
		9/5 少し眠たそう

(図 3)

例えば (図 1) の生徒 A は、5 月の ASSESS とストレスチェック共に、困り感を抱えている様子はなく、その時点では欠席もなかった。しかし、6 月時の ASSESS では、極端に上昇している項目もあるが、数値が低下している項目もあり、不登校傾向になる生徒として抽出を行っ

た。その後、学年を中心に、教育相談や日々の関わりのなかで、より注意深く関わることを心掛けた。2 学期以降、欠席こそないが、遅刻の回数が増えてきているので、今後も注意が必要な生徒の一人である。

この生徒Aのように、学校生活を見ているだけでは、把握できない生徒の困り感をいち早く認知することができるというところに、このスクリーニング会議の強みがある。データを基にした抽出方法だからこそ、目ではわからない生徒の実態を把握することができる。

4 研究のまとめ

昨年度までは、ASSESS やストレスチェックの実施は行っていたが、学校全体としてスクリーニング会議を行うまでには至っておらず、担任中心の手立てのみとなっていた。今年度からは、スクリーニング会議を実施し、学年や学校として組織的に不登校傾向の生徒にアプローチをすることができた。その中で、学校全体として不登校生徒の割合が 5.8%程度(12 月時点)と、数年前までの本校の割合と比較しても、減少していることがデータから読み取れる。この成果の要因としては、組織的に早期前対応をすることで、「早く」、「複数の目」で生徒に関わることができたからだと考える。

しかし、この取組も今年度からの実施となっているため、今後も継続していくことで新たな課題にも直面すると考える。直近の課題としては、スクリーニング会議をするまでの事務作業を削減することと、スクリーニング会議の効率化である。

また、全欠生徒などの完全不登校生徒に対しては、アプローチの方法や手立てが確立していないことも今後の課題である。本校の入学生においても、小学校 6 年生の時点で不登校の生徒が複数名いる現状では、その課題を解決することが次の一歩だと考える。

今後も、「小中一貫教育の充実」、「生徒指導ではなく生徒支援をベースとした考え」に重点を置き、今後の教育現場の課題に向き合っていくことを目指す。